

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

斎藤祐一氏によって提出された博士論文は、学校体育における「長い距離を走る運動」の学習内容について再検討することを目的としたものである。従来から学校体育では、「長距離走(競争としてのスポーツ)」と「持久走(体力を高める運動)」を学習内容として区別し学習指導がなされてきた。これは学習指導要領が背景とする、人間と運動との価値的な関係性を観点とした「運動の特性論」が大きな影響を与えている。これに対して本論文は、学校現場では実はそれほど区別されておらず、しかしながら一定の教育的価値を暗黙のうちに認められているこの2つの学習内容について、教員や学習者、そしてその魅力を知っている者の実際の認識から「長い距離を走る運動」として統合的に概念化しその教育的価値を明らかにしようとするものである。この論文により「長い距離を走る運動」が持つ学習内容としての価値が「他者との関係の中で自己を認識する」という観点から明らかにされたことから、これまで学習指導としては区別が曖昧であった「長距離走(競争としてのスポーツ)」と「持久走(体力を高める運動)」を統合的に新しい学習内容として実践的に検討することが可能になった。従って、本博士論文の目的と意義には独創性があると判断できる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本博士論文で用いられた方法は、M-GTA (Modified Grounded Theory Approach) 並びに SCAT (Steps for Coding and Theorization) を援用したデータ分析である。これらの研究手法は、社会科学において、概念形成や認識に関する質的な研究方法としてよく知られるものである。特に本博士論文では、「長い距離を走る運動」として新たに学習内容を概念化するためには、認識や魅力といった概念を説明する必要があったため質的研究法による探索的戦略が必要であった。このことから、本博士論文の研究方法は妥当なものであったと考えられる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本博士論文では、教員、学習者、そしてその魅力を知っている者の実際の認識を分析するために、体育科教育研究でも近年よく使われている M-GTA 並びに SCAT の研究手法にのっとり、典型性のある当該の集団を事例対象としてデータが適切に集められている。こうして収集されたデータに対して、定義づけ、概念生成、カテゴリー生成という一連の手順が分析ワークシートを使って一例一例丁寧に作成することを通して分析がなされており、またその後に丁寧な検討を通してストーリーラインを描くなど、手順とポイントを踏まえた分析が一貫して適切に行われている。また、調査も倫理的配慮を適切に行い実施しているといえる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本博士論文で考察されたことは、中学校保健体育科教員の「長距離走」および「持久走」の認識形成プロセスを明らかにした上で、一般市民ランナーを対象としてランニングの認識形成プロセスを明らかにし、その検討をその魅力を見出すとともに、これらの分析から導き出された学習

内容の構成要素から、「長い距離を走る運動」の魅力を仮定し、集団性のある「長い距離を走る運動」の授業を展開する中で、実践的に学習内容の検証と修正を図ることであった。また、自己・他者・モノとの言語的／非言語的なコミュニケーションが「長い距離を走る運動」への参加を促進し、それに随伴するように生徒たちの認識対象や身体感覚が拡張されることや、集団性のある「長い距離を走る運動」では、学習形態としての集団性よりも「他者を媒介として自己を知ることができたか」という評価の観点の明確化が優先されることを見出している。これまで曖昧であった「長距離走／持久走」に対して、魅力や認識といった学習当事者側からの学習内容論が合理的にあるいは実践的に整理されたことは、高く評価されるものである。これらのことから、本博士論文における研究結果の考察と議論は、学術的に高い水準にあると判断できる。

（５）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本博士論文が対象とした、体育科教育研究における「長距離走」並びに「持久走」に関する学習内容論の議論は、これまで実践的にはその齟齬や整理の必要性が感じられていたにも関わらず、1980年代に検討された研究によってそのままりードされてきた、一つの大きな課題であったと思われる。本博士論文では、他者と走るからこそ得られる自分自身の状態や環境への気づきという点に、教える側と学ぶ側、そして日常生活の中で楽しんでいる愛好者に共通した運動の意味や価値を明らかにしており、教育実践の中に生じていた学習指導要領を含む学習内容論の「違和感」に対して正面から取り組み、技能や知識といったコンテンツとしての側面以外に、当事者の主体的な学びに結びつきやすい、コンピテンシーベースでの知見としてそれを提供したことは、今後の教科体育の学習指導に、深い洞察と新しい視点を与えるものになったと考えられる。

これらのことから、審査委員会委員全員一致で、齋藤祐一氏によって提出された博士論文は高い学術的水準にあり、東京学芸大学博士課程連合学校教育学研究科の博士論文としてふさわしいと判断した。また、教科体育の学習指導を対象とし、先行するこの分野の研究の蓄積の上に、新しい知見を合理的な手順によって提供したものであることから、博士の名称は「教育学」がふさわしいと判断した。